

「メモの取り方を見直す」

日々の業務のなかで書き留めなければならぬこと、気づいたことなどをメモしておく。

なかには、手の甲や掌てのひら、紙片等に記す人もいるが見苦しく映る。

るホツキキス止め等は要らない。まず、A4を二つ折りにしてA

5に、続けて二つ折りにするとA6に、さらに二つ折りにしたものがA7だ。3回続けて二つ折られた紙を開くと、八等分されたことが折り目からわかる。

「学びて思わざれば則ち罔し」
転期に立つ経営の視座⑤

則ち罔し

はやかわ・ひろし

経営コンサルタント。「継業と人材創造塾」主宰。「介護ビジョン」編集委員。介護福祉教育マスター。著書に「99の言葉の杖」(日本医療企画)、「早川浩士の常在学場」(筒井書房)、「介護人材創造塾」(筒井書房)、「介護保険改正に勝つ!経営」(年友企画)、「データで徹底分析 介護事業の最新動向と経営展望」(日本医療企画)など。

HP: <http://www.hayakawa-planning.com>

ブログ: <http://ameblo.jp/hayakawa-planning/>

A4コピー用紙(210mm×297mm)の八分の一をA7(105mm×74mm)といい、ポケットノートサイズともいう。

1枚のA4用紙に折り目を3回入れ、ある折り目にハサミで1回切れ目を入れると8ページのメモ帳(小冊子)ができる。ページを綴

開いた紙は、再び折り目に沿って二つ折り(210mm×148mm)にする。次にハサミを使って横の折り目を真ん中(二つ目の折り目)まで切る。

三度開いて、今度は横(105mm×97mm)に折る。ハサミで切った部分を菱形状になるように開

き、全ての折り目を重ね合わせる。とメモ帳になる。

まずは、自らつくって試すことを勧める。新人や次世代リーダーの育成・指導のうえからも、メモの取り方を見直す一助にしたい。

「思いつて学ばざれば則ち殆し」

メモの取り方を学んだことがある、その指導を受けたことがある、という人は意外に少ない。

職員と共にメモ帳をつくり、一日の業務を終えたところで、各自がどんなメモの取り方をしたのかということを見比べると、実に千差万別であることがわかる。

メモを取るのか取らないのかということについて、各自の自発性や自主性に任せていなかったか。

メモを取る人は仕事への意識が高く、取らない人は仕事への意識が低いと、勝手に思い込んではいなかったか。

なかには、メモの取り方がわからない、書くのが苦手、面倒だ、などの理由からメモ帳が白紙のまま一日を終える人がいる。

何も書くことがなかったのでは、何を書くかのように書けばよいのか、メモの取り方を学ぶ機会

がなかったのではないかと、という疑問を持つことにも意味がある。

「今回入職した職員は、仕事の覚え(メモの取り方)が悪すぎる!」と、ため息をつくのではなく、「今回入職した職員に仕事の覚え方(メモの取り方)を教えていない?」と、自らの姿勢を振り返る必要があるのではないかと。

『論語(為政第二)』の「学びて思わざれば則ち罔し、思いつて学ばざれば則ち殆し」を噛みしめたい。

「学んでも、自ら考える(試してみる、説明してみる、疑ってみる等)ようでなければモノにはならない。また、自らの考えだけで他者から学ぶ(教えを受ける、話を聞く、観察する、議論する等)という姿勢に欠けるのはよくない」というのが、大意である。

毎日一枚のメモ帳に記したメモは、開いてバインダーに綴じて職場内で共有する。

各自の綴りに目を通しながらメモの取り方を学び合うことで、「学ばずば学ばず、自分が何も知らなかったことに気づく。気づけば気づくほど、また学びたくなる」*1と、仕事の覚え方に関心が払えるような創意工夫を施したい。

*1: アインシュタインの名言から